

唯物史観にむけて

限りある存在を視すえる中から、ヘーゲル大論理学における有論—本質論—概念論における有限的対象の時間及び空間における把握、又有限的事物の変化の中の柔变的自己同一要素の過渡的把握であり、個別の中の本質論への移行の解明としてある。云いかえれば個別の主体の問題を通じての史的唯物論の解明、又過渡的段階における試みとして、表現行為における本質から概念論への異端的試みである。人間解放の物質的变化を洞察する科学的真理と人間の実存的支柱の間に存在する間隙を自らの桎梏とする過渡及び特殊領域にある時、即ち、レーニンの『もちろん物質と意識の対立も、きわめて局限された範囲内においてのみ絶対的な意義がある。即ち向を第一次的な物として、何を第二次的な物と認むべきかという認識論上の根本問題における惑る一定の場合においてだけである。この限界の外では、この対立が相対的性質のものであることは争うことができない』〈唯物論と経験主義批判論〉がのべている如く、意識と物質及び社会諸関係、さらにそれをにう主体の個別性が産みだす。

必然的問題を原則的やきなおしによるおしつけ解答では、こたえることはできない。

すべり落ちやすい悪しき評価としての〈観念論的傾向〉と〈ブルジョア感性の空転〉及び対極としての〈物質の逆規定的こじつけ主義〉について。（後述によって再度微密化）これら両者は現在、我々は進まねばならない。もし我々が過渡的現在における意識と普遍化する時、約言すれば、現在の意識の事実を絶対化する時、自然の基本そのものが（自然史的発生における生産関係の自然弁証法）逆に特殊領域（過渡的現在に実在するゆえの根元性）から基礎づけられ相対的歴史の把握が普遍的反映とはならない。一般に観念論者が唯物論者に対峙する形で論理を拡大していくとき起こる形式であるが、この論理の拡大再生産は、ヘーゲル忠弁哲学の観念的形而上学と同様にすべりこむ。

局限された範囲外の行為的現在から出発する我々は全てを抱括する相対性を知らない。

問題の過渡的領域なるがゆえの認識における有論、即ち悟性的段階から本質論への移行は、本質論そのものが悟性的段階における個別の時間性における本質的解明であるといってもさしつかえない程の端緒的な、極めてじみな展開であり、我々自身の今後の過程における種々の対象化の中で解明していくものである。次に、物質の逆規定的こじつけ主義者についても我々は、奇妙にもちがった方向からヘーゲルの観念的形而上学の目的論的自己展開に落ち入っているのを見ることができる。

彼ら自身主体性の中で史的唯物論が持つ今日的課題、即ち一般的科学的微密化と同時に、人間自体のもつ内的因子の引きおこすさまざまな現象の困難性を迂回して、自然弁証法による概念論までのおしあげ、そしてそこからの逆規定的人間主体の解明、こういった論理整合は、梯—黒田とつづく革共同にたんてきに示されている。物質の自己実現ではなく、物質等に規定されている有限的対象の普断の物断への接近の展開であり、人間なき物質に必要以上規定された概念論は、一般的抽象的概念とならざるおえない。

以上のことをふまえて、史的唯物史観における我々の把握が一体どこでなさなければならないかをとわねばならない。

連続シンポジウム

■ 〈幻〉〈出会い〉〈憑依〉

渋谷考輔（詩人）
菅谷規矩雄（詩人）
諸田和治（法政大学講師）

■ 空隙へのいざない。唯物史観 にむけて

市井三郎（教授）

■ 浮名の黒幕No. 2 巷談に花が咲く 〈共生〉 〈同棲〉 〈かどわかし〉

井川ひさし（脚本家）
出口典雄（演出家）
佐々木 守（脚本家）

■ 〈風越〉〈風賭〉〈風葬〉

清水 昶（詩人）
阿久根靖夫（詩人）

11月 3 ～ 5 日
P.M.2：00～4：00
於 学生会館地下